

## 日系製造業企業の産業集積とグレーター上海の都市構造 ―戦前と今日―

名古屋学院大学商学部 有賀敏之

今日、中国の主だった都市には一様に日系企業が進出している。広い中国のことであるから、日本ではまったく無名でありながら、日本の中規模の県に匹敵する面積と数百万人の人口を擁する都市がさらに存在し、そうした都市に日本人のコミュニティもまた存在する。またこの進出のありようには濃淡があり、特定の都市の中の一定の範囲に日本の大企業のグループが重層的に進出して生産集積を形成している場合もあれば、日系の工場が飛び地のように完結した形で存在し、周辺地域の中国資本企業とは調達面で完全に隔絶している場合もある。本報告では直近3箇年にわたって天津市・上海市・南通市・蘇州市・無錫市・杭州市・台州市等において集中的に実施した、現地進出日系企業に対するヒアリングの結果を踏まえ、とりわけ上海市に焦点を当てて製造業の生産の集積の観点から、こうした調達と生産集積の問題に関する解明を行う。

経営史や経済史の研究の蓄積が示すとおり、戦前期にはGDP比で今日に匹敵するほどのアジア地域への盛んな直接投資が行われ、ことに上海市の旧市街の特定の2箇所においてきわめて分厚い生産の集積がみられた。上海には戦前に数万人に上る日本人が居住しており、今もまたそれを上回る人数の日本人が居住している。そしてこの当時の日系の紡績業(在華紡)が進出していた地域と、今日やはり日系の製造業が進出している地域との間には、一定の地理的対応関係が認められる。文献研究のみならず、報告者が実際に現地に足を運んで(文字どおり徒歩踏査により)調べた戦前の工場跡地利用の現状に関する調査結果も交えながら、中央政府と上海市政府による都市計画の観点から、この点について明らかにする。

端的に言うならば、今日の日系大手電機企業の集中する金橋地区は、戦前に日本の大手紡績業が集積していた2大拠点の一つ、楊樹浦から黄浦江を挟んで東方に拡張発展したものである。もちろん両者は不連続で、産業も入れ替わっており、体制の転換も伴っていて単純な移転といったものではない。かつての紡績工場跡地では一様にマンション建設の再開発が進んでおり、取り壊しが今も進行する一方で、楊樹浦では工場群の整然とした赤煉瓦の外観をそのまま活かしたアウトレットモールの再開発といった、産業遺産を活用する形での事例も散見される。

時間に余裕があれば、さらに上海近郊の主要都市や台州等についても言及し、中央政府や地方政府による技術開発区の設定と、日系を始めとする外資系企業の集積ならびに調達の実態について浮き彫りにしてみたい。なお本報告のフルペーパーは昨年度までに公刊済みであるが(単著「グレーター上海日系企業の産業集積」(『名古屋学院大学論集』第48巻第1号 2011年7月刊 他)、内容に関してはいずれの学会・研究会でも未発表である。